

【アラビア語】

読書案内

アラビア語が話されているアラブ世界を知るには、松本弘編著『現代アラブを知るための 56 章』（明石書店エリア・スタディーズ 120、2013 年）が良いでしょう。アラブ世界全体の歴史、文化、社会、そして各国事情が簡潔にまとめられています。

アラビア語と深い関わりのある宗教、イスラームについては、小杉泰・江川ひかり編『イスラーム社会生活・思想・歴史』（新曜社、2006 年）が良いでしょう。教義だけでなく、歴史や信徒の生活まで目配りされており、イスラームを総合的に知るための格好の入門書となっています。

そもそも日本人はいつからアラブ世界やイスラームと関わりがあるの？という疑問を持っている方は、杉田英明著『日本人の中東発見—逆遠近法のなかの比較文化史』（中東イスラム世界 2）（東京大学出版会、1995 年）を読んでください。イランやトルコなど非アラビア語圏の話も含まれますが、古代・中世から江戸時代・明治時代へと、日本と中東地域とが相互に発見しあっていく様が描かれています。

初級・中級クラスでそれぞれ指定される教科書以外に、アラビア語学習に役立つ本として、新妻仁一著『アラビア語文法ハンドブック』（白水社、2009 年）があります。入門者から上級者まで継続して使える文法書です。

日本ではアラビア語文学はあまり知名度がなく、『アラビアンナイト』しか知らないという方も多いと思います。『アラビアンナイト』に関しては、岩波文庫版『完訳 千一夜物語』（全 13 冊）が、（フランス語からの重訳ですが）訳文がとても美しく、入門編として読みやすいでしょう。平凡社東洋文庫版『アラビアン・ナイト』（全 18 冊）はアラビア語からの訳です。

現代アラビア語文学に関してぜひお勧めしたいのが、岡真理著『アラブ、祈りとしての文学』（みすず書房、2008 年）です。大きな歴史の流れからこぼれ落ちる小さき人々の尊厳を、小説だけが描けるのではないか、という問いを考える名著です。パレスチナ問題に関心をもっている人も読むと良いでしょう。

文学作品の中のアラブ人ではなく、生きているナマのアラブ人ってどんな人たち？と思う人は、師岡カリーマ・エルサムニー著『恋するアラブ人』（白水社、2004 年）を読みましょう。エジプト人の父・日本人の母のもとに生まれた著者が描くアラブ人スケッチです。アラビア語の歴史や正則アラビア語と口語についてもふれられています。

最後に、書籍ではないのですが、近年、アラビア語映画の日本語字幕版 DVD が販売されるようになってきましたので、いくつか紹介します。実在のパレスチナの歌手の半生を描いた『歌声にのった少年』（2015 年）、「アラブ世界で最もパワフルな女性」と言われるレバノン人監督・女優のナディーン・ラバキー主演の『キャラメル』（2007 年）などは、映画としても見やすいでしょう。これらで使用されているのはパレスチナやレバノンの口語なので、正則アラビア語の学習とは少し離れますが、アラブ世界を映像で知るには役立つと思います。